

「がん哲学」と出会っていて、良かった！

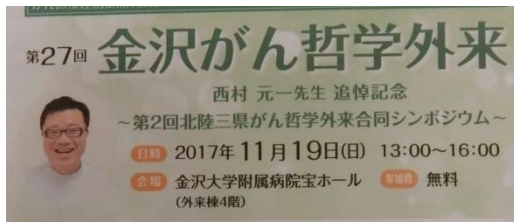
がんとむきあう会 理事長 西村 詠子

11月19日に金沢大学附属病院「宝ホール」で北陸三県がん哲学外来合同シンポジウムが開かれた。西村元一追悼と謳ってくださっている。ずらりと見慣れた先生方のお顔、そこに居るはずの主人がいない…、これが現実だけれどやっぱり寂しいし、主人も居たかっただろうと思うと悲しい。皆様のご活躍を知ればなお、主人ももっともっとやりたかっただろうと思う。きりが無い…。

しかし、今日の梶山徹先生の特別講演でも「人生の出来事は変えられないがその意義付けは変えられる、限りある時間をどれほど有意義に過ごせたかである」と教えてくださる。がん哲学外来に出会っていたから救われたという実感が沸く。悲しみは消えはしないけれど、自分を律するための言葉を学ぶ。プロの寄り添い人が私を気にかけて下さる…、有り難い。

樋野先生の言葉どおり、人には最後に死ぬという大きな仕事が残る、そのために哲学的な考えを取り入れる必要がある。そう考えた方が心を強く持っていられるのだ。主人に第2回の養成講座（佐久市クアハウス）と一緒に連れて行かれ、コーディネーターの認定を頂いた今年に亡くなるなんて、必然だったのでしょうか。

「苦悩とむきあうことなしに成長はない」そうです、ですから私はこれからも成長できそうです。



山田圭輔先生 ポスターの中で笑顔の「元ちゃん」先生。



シンポジストの方々。左から樋野興夫先生、梶山徹先生（関西電力病院）、宗本義則先生、竹川茂先生。



講演会「環境発がん～アスベスト・中皮腫～」

アスベスト患者と家族の会 古川 和子

11月26日、大阪中之島公園近くの「エルおおさか」に樋野興夫先生をお招きして講演会を行いました。主催は「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会関西支部」です。私は以前から樋野先生のお名前を存じ上げていましたが直接のご縁はなく、また、「がん哲学外来」にも関心がありましたが、身近での講演会もありませんでした。そうした中で2015年7月、佐久病院農村医学夏季大学にて「若月賞」という身に余る賞を頂きその会場で出会ったのが星野昭江さんでした。

星野さんからも樋野先生のお話を聞き、ぜひとも大阪で講演会を行いたいと考えるようになりました。しかし、私たちは「患者と家族の会関西支部」という小さな組織です。どのようにしてお招きすればいいのか…と考えている時に2016年9月、島根県益田市で樋野先生にお会いする機会を得ました。

「中皮腫や肺がんなどのアスベスト疾患患者と家族の集まりに来てください」という私の無謀な願いを先生は快諾していただきました。そして1年余り経った11月26日、70名収容の会場いっぱいに皆さんが駆けつけてきました。

1時間の講演は、先生のお話が楽しくて終始笑いが途絶えませんでした。その後休憩を挟んで1時間の「質問」時間を設けました。事前に樋野先生から「会場から多くの方の質問を受けたい」と言われていたので、一人でも多くの方にマイクが渡せるよう配慮しました。最初に挙手をしたのは中皮腫で闘病中の男性患者さんでした。「先生のお話では納得できません」との質問です。「どうてい、納得できないでしょう！」と言われた先生から発するのは、環境発癌物質であるアスベストを吸って中皮腫になった人々に対する深い慈しみの言葉でした。患者の怒り、無念さを代弁するような先生の言葉は、会場の方々の心に沁み込みました。まさに先生のお話は「言葉の処方箋」です。

「いい人生は最期の5年で決まる」そうです。しかし何時が最期の5年なのか分かりません。毎日が「最期の5年」だといわれました。人は最後に「死ぬ」という大切な仕事が残っているそうです。

最後にマイクを受け取って「皆さん、樋野先生のところ集合！」と号令をかけるや否や、我先きに駆け寄った参加者の皆さんの心は一つになっていました。

大阪の地でも「がん哲学外来」の活動を広めるお手伝いが出来れば…と心より願っています。



樋野先生を囲んで「全員集合！」。写真に入りきれない！向かって右端に立っている女性が、古川和子さん。